

よだかの星

宮沢賢治

よだかは、実にみにくい鳥です。

顔は、ところどころ、味噌をつけたようにまだらで、くちばしは、ひらたくて、耳までさけています。

足は、まるでよぼよぼで、一間とも歩けません。

ほかの鳥は、もう、よだかの顔を見ただけでも、いやになってしまふという具合でした。

たとえば、ひばりも、あまり美しい鳥ではありませんが、よだかよりは、ずっと上だと思っていましたので、夕方など、よだかにあうと、さもさもないやそうに、しんねりと目をつぶりながら、首をそつ方へ向けるのでした。もつとちいさなおしゃべりの鳥などは、いつでもよだかのまっところから悪口をしました。

「ヘン。又出て来たね。まあ、あのざまをござらん。ほんとうに、鳥の仲間のつらよごしたよ。」

「ね、まあ、あのくちのおおきいことさ。きつと、かえ

るの親類か何かなんだよ。」

こんな調子です。おお、よだかでないただのたかならば、こんな生はんかのちいさい鳥は、もう名前を聞いただけでも、ぶるぶるふるえて、顔色を変えて、からだをちぢめて、木の葉のかげにでもかくれたでしょう。ところが夜だかは、ほんとうは鷹の兄弟でも親類でもありませんでした。かえつて、よだかは、あの美しいかわせみや、鳥の中の宝石のような蜂すずめの兄さんでした。蜂すずめは花の蜜をたべ、かわせみはお魚を食べ、夜だかは羽虫をとつてたべるのでした。それによだかには、するどい爪もするどいくちばしもありますのでしたから、どんなに弱い鳥でも、よだかをこわがる筈はなかつたのです。それなら、たかという名のついたことは不思議なようですが、これは、一つはよだかのはねが無暗に強くて、風を切つて翔けるときなどは、まるで鷹のように見えたことと、も一つはなきごえがするどくて、やはりどこか鷹に似ていた為です。もちろん、鷹は、これをひじょうに気に入っていて、いやがつていました。それですから、よだかの顔さえ見ると、肩をいからせて、早く名前をあらためろ、名前をあらためると、いうのでした。

ある夕方、とうとう、鷹がよだかのうちへやって参りました。

「おい。居るかい。まだお前は名前をかえないのか。ずいぶんお前も恥知らずだな。お前とおれでは、よつぽど人格がちがうんだよ。たとえばおれは、青いそらをどこまでも飛んで行く。おまえは、曇つてうすぐらい日か夜でなくちゃ、出て来ない。それから、おれのくちばしやつめを見る。そして、よくお前のとくらべて見るがよい。」

「鷹さん。それはあんまり無理です。私の名前は私が勝手につけたではありません。神さまから下さったのです。」

「いいや。おれの名なら、神さまから貰ったのだと云つてもよからうが、お前のは、云わば、おれと夜と、両方から借りてあるんだ。さあ返せ。」

「鷹さん。それは無理です。」

「無理じゃない。おれがいい名を教えてやろう。市蔵というんだ。市蔵とな。いい名だろう。そこで、名前を変えるには、改名の披露というものをしないといけない。いいか。それはな、首へ市蔵と書いたふだをぶらさげて、

私は以来市蔵と申しますと、口上を云つて、みんなの所をおじぎしてまわるのだ。」

「そんなことはとても出来ません。」

「いいや。出来る。そうしろ。もしあさつての朝までに、お前がそうしなかつたら、もうすぐ、つかみ殺すぞ。つかみ殺してしまうから、そう思え。おれはあさつての朝早く、鳥のうちを一軒ずつまわつて、お前が来たかどうかを聞いてあるく。一軒でも来なかつたという家があったら、もう貴様もその時がおしまいだぞ。」

「だつてそれはあんまり無理じゃありませんか。そんなことをする位なら、私はもう死んだ方がましです。今すぐ殺して下さい。」

「まあ、よく、あとで考えてごらん。市蔵なんてそんなにわるい名じゃないよ。」鷹は大きなねを一杯にひろげて、自分の巢の方へ飛んで帰って行きました。

よだかは、じつと目をつぶつて考えました。

（「たい僕は、なぜこうみんなにいやがられるのだろう。僕の顔は、味噌をつけたやうで、口は裂けてるからなあ。それだつて、僕は今まで、なんにも悪いことをしたことがない。赤ん坊のめじろが巢から落ちていたときは、助

けて巢へ連れて行ってやった。そしたらめじろは、赤ん坊をまるでぬす人からでもとりかえすように僕からひきはなしたんだなあ。それからひどく僕を笑ったつけ。それにああ、今度は市藏だなんて、首へふだをかけるなんて、つらいはなしだなあ。」

あたりは、もううすくらくなくなっていました。夜だかは巢から飛び出しました。雲が意地悪く光って、低くたれています。夜だかはまるで雲とすれすれになって、音なく空を飛びまわりました。

それからにわかによだかは口を大きくひらいて、はねをまっすぐに張って、まるで矢のようにそらをよこぎりしました。小さな羽虫が幾匹も幾匹もその咽喉にはいりました。

からだがつちにつくつかないうちに、よだかはひらりとまたそらへはねあがりました。もう雲は鼠色になり、向うの山には山焼けの火がまつ赤です。

夜だかが思い切って飛ぶときは、そらがまるで二つに切れたように思われます。一疋の甲虫が、夜だかの咽喉にはいつて、ひどくもがきました。よだかはすぐそれを呑みこみましたが、その時何だかせなかがぞつとしたよ

うに思いました。

雲はもうまっくろく、東の方だけ山やけの火が赤くうつて、恐ろしいようです。よだかはむねがつかえたように思いながら、又そらへのぼりました。

また一疋の甲虫が、夜だかののどに、はいりました。そしてまるでよだかの咽喉をひつかいてばたばたしました。よだかはそれを無理にのみこんでしまいました。その時、急に胸がどきつとして、夜だかは大声をあげて泣き出しました。泣きながらぐるぐるぐるぐる空をめぐるのです。

（ああ、かぶとむしや、たくさん羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのただ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。ああ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで餓えて死のう。いやその前にも鷹が僕を殺すだろう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向うに行つてしまおう。）

山焼けの火は、だんだん水のように流れてひろがり、雲も赤く燃えているようです。

よだかはまっすぐに、弟の川せみの所へ飛んで行きました。きれいな川せみも、丁度起きて遠くの山火事を見

ていた所でした。そしてよだかの降りて来たのを見て云いました。

「兄さん。今晩は。何か急のご用ですか。」

「いや、僕は今度遠い所へ行くからね、その前一寸お前に遭いに来たよ。」

「兄さん。行っちゃいけませんよ。蜂雀もあんな遠くに  
いるんですし、僕ひとりぼっちになってしまいうじやありませんか。」

「それはね。どうも仕方がないのだ。もう今日は何も云わないで呉れ。そしてお前もね、どうしてもとらなければならぬ時のほかはいたずらにお魚を取ったりしないようにして呉れ。ね、さよなら。」

「兄さん。どうしたんです。まあもう一寸お待ちなさい。」  
「いや、いつまで居てもおんなじだ。はちすずめへ、あとでよろしく云ってやって呉れ。さよなら。もうあわないよ。さよなら。」

よだかは泣きながら自分のお家へ帰って参りました。みじかい夏の夜はもうあけかかっていました。

羊歯の葉は、よあけの霧を吸って、青くつめたくゆれ  
ました。よだかは高くきしきしきと鳴きました。そし

て巣の中をきちんとかたづけ、きれいにからだの中のはねや毛をそろえて、また巣から飛び出しました。

霧がはれて、お日さまが丁度東からのぼりました。夜だかはぐらぐらするほどまぶしいのをこらえて、矢のよう  
に、そっちへ飛んで行きました。

「お日さん、お日さん。どうぞ私をあなたの所へ連れてつて下さい。灼けて死んでもかまいません。私のよう  
なみにくいからだでも灼けるときには小さなひかりを出す  
でしょう。どうか私を連れてつて下さい。」

行っても行っても、お日さまは近くなりませんでした。かえつてだんだん小さく遠くなりながらお日さまが云  
いました。

「お前はよだかだな。なるほど、ずいぶんつらからう。今度そらを飛んで、星にそなたのんでごらん。お前はひ  
るの鳥ではないのだからな。」

夜だかはおじぎを一つしたと思いましたが、急にぐらぐらしてとうとう野原の草の上に落ちてしまいました。そしてまるで夢を見ているようでした。からだがずうつと赤や黄の星のあいだをのぼって行ったり、どこまでも  
風に飛ばされたり、又鷹が来てからだをつかんだりした

ようでした。

つめたいものがにわかに顔に落ちました。よだかは眼をひらきました。一本の若いすすきの葉から露がしたたつたのでした。もうすっかり夜になって、空は青ぐろく、一面の星がまたたいいていました。よだかはそらへ飛びあがりました。今夜も山やけの火はまつかです。よだかはその火のかすかな照りと、つめたいほしあかりの中をとびめぐりました。それからもう一ぺん飛びめぐりました。そして思い切つて西のそらのあの美しいオリオンの星の方に、まっすぐに飛びながら叫びました。

「お星さん。西の青じろいお星さん。どうか私をあなたのところへ連れてつて下さい。灼けて死んでもかまいません。」

オリオンは勇ましい歌をつづけながらよだかなどはてんで相手にしませんでした。よだかは泣きそうになつて、よろよろと落ちて、それからやつとふみとまつて、もう一ぺんとびめぐりました。それから、南の大犬座の方へまっすぐに飛びながら叫びました。

「お星さん。南の青いお星さん。どうか私をあなたの所へつれてつて下さい。やけて死んでもかまいません。」

大犬は青や紫や黄やうつくしくせわしくまたたきながら云いました。

「馬鹿を云うな。おまえなんか一体どんなものだい。たかが鳥じゃないか。おまえのはねでここまで来るには、億年兆年億兆年だ。」そしてまた別の方を向きました。

よだかはがつかりして、よろよろ落ちて、それから又二へん飛びめぐりました。それから又思い切つて北の大熊星の方へまっすぐに飛びながら叫びました。

「北の青いお星さま、あなたの所へどうか私を連れてつて下さい。」

大熊星はしずかに云いました。

「余計なことを考えるものではない。少し頭をひやして来なさい。そう云うときは、氷山の浮いている海の中へ飛び込むか、近くに海がなかったら、氷をうかべたコップの水の中へ飛び込むのが一等だ。」

よだかはがつかりして、よろよろ落ちて、それから又、四へんそらをめぐりました。そしてもう一度、東から今のぼった天の川の向う岸の鷲の星に叫びました。

「東の白いお星さま、どうか私をあなたの所へ連れてつて下さい。やけて死んでもかまいません。」

鷺は大風に云いました。

「いいや、とてもとても、話にも何にもならん。星になるには、それ相應の身分でなくちゃいかん。又よほど金もいるのだ。」

よだかはもうすっかり力を落してしまつて、はねを閉じて、地に落ちて行きました。そしてもう一尺で地面にその弱い足がつくというとき、よだかは俄かにのろしのようにそらへとびあがりました。そらのなかほどへ来て、よだかはまるで鷺が熊を襲うときするように、ぶるつとからだをゆすつて毛をさかだてました。

それからキシキシキシキシと高く高く叫びました。その声はまるで鷹でした。野原や林にねむっていたほかのとりは、みんな目をさまして、ぶるぶるふるえながら、いぶかしそうにほしぞらを見あげました。

夜だかは、どこまでも、どこまでも、まつすぐに空へのぼって行きました。もう山焼けの火はたばこの吸殻のくらいにしか見えません。よだかはのぼつてのぼって行きました。

寒さにいきはむねに白く凍りました。空気がうすくなつた為には、はねをそれはそれはせわしくうごかさなけ

ればなりませんでした。

それなのに、ほしの大きさは、さつきと少しも変わりません。つくいきはふいごのようです。寒さや霜がまるで剣のようによだかを刺しました。よだかははねがすっかりしびれてしまいました。そしてなみだぐんだ目をあげてもう一ぺんそらを見ました。そうです。これがよだかの最後でした。もうよだかは落ちてゐるのか、のぼつてゐるのか、さかさになつてゐるのか、上を向いてゐるのかも、わかりませんでした。ただこころもちはやすらかに、その血のついた大きくなくちばしは、横にまがつては居ましたが、たしかに少しわらつて居りました。

それからしばらくたつてよだかはつきりまなこをひらきました。そして自分のからだがいま燐の火のような青い美しい光になつて、しずかに燃えてゐるのを見ました。

すぐとなりは、カシオピア座でした。天の川の青じろいひかりが、すぐうしろになつていました。

そしてよだかの星は燃えつづけました。いつまでもいつまでも燃えつづけました。

今でもまだ燃えています。

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日第1刷発行

1991（平成3）年3月10日4刷

底本の親本：「新修 宮沢賢治全集」筑摩書房

入力：佐々木美香

校正：野口英司

ファイル作成：野口英司

1998年8月20日公開

1999年7月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、

制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。